

## アリオナが撮る、素晴らしい愛情あふれる写真たちはみな、一つのことについて伝... 1/1 ページ

アリオナの撮る写真はみな、素晴らしい、愛情あふれる写真ものばかりだ。私はどの写真もひとつのことを観る側に伝えようとしていると思う。

一体何を伝えようとしているのだろうか？（芸術作品について語る時はどうがんばっても、ぼやっとした輪郭しか表現出来ないがものだが。）一言で言ってしまうと、これらの写真は「仕事をする人々」を映しているのではないだろうか。

このように書いてみて、私自身、この使い慣れない表現に戸惑っている。言葉は、やはりある程度使ってみて初めてこなれた表現として出てくるものだろう。使えば使うほど味が出る。

そして、人は仕事をすることによってこそ、より人らしくになっていく。もちろんこの場合の「仕事」とは単調でつまらないものでも、時間に追われて慌ててやるたぐいのものではない。この仕事とは、理性的な人間の活動のことだ。生産すること、手で何かを造り出すこと、創造すること。この観点から見ると、作っているものが歯車であっても、ケワタガモの羽布団であっても、眠り人形であっても違いはない。

これらの写真の奥にはみな同じように、郷愁と悲しみ、そしてあきらめの思いが沈んでいる。（オーダーメイドの仕立屋が作る服が、中国産の量産品の波に飲まれてしまうのはいつのことか。）

にもかかわらず、この作品にもっと鮮明に浮き出されているのは、センスの良いユーモアと、生活の中の失われゆく刺激や面白み、仕事の作業の中にある喜びではなからうか。

アリオナ・フランクルは、それらを観察し、演出することなく、少し寂しげだがセンスのよいユーモアと冷静な楽観的なものの見方を写真に描いている。写真が映し出すものは、全盛期を過ぎてはいるが、まだこの世に存在しているものなのだ。いつか滅び、廃れゆく運命にあったとしても、今はまださわることができ、写真に収めることができる。朽ち果ててこの世から消え去るのではない。ただ、舞台が終わって幕が閉じるだけだ。この二つは必ずしも同じことではない。

アリオナの写真では、職人がメインで機械や作品が添え物としてあるのだろうか。いや、そうではない。職人は自分たちの作品の中にとけ込んでいる。時計屋も美容師も、ケワタガモの羽布団職人も、鍵屋も記章職人も陶器の置物のマイスターも、女性写真家も、みな自分たちの作品と、そして自分たちの仕事場と一つになっている。

簡素で成熟した「写真詩」と呼ばれるものは、センチメンタルな叙情主義に走ることなく、むしろ明瞭で客観的で無駄のない研究に近い。煙草が寄りかかった靴の写真などは、まるで個人的なエンブレムのようだ。あの写真から悲劇の歌が一曲まるごと書けそうな程に靴の魂が映し出されているようだ。

アリオナの写真のモチーフは、今この瞬間に保存され、芸術として生まれ変わっているのだ。